

桑田衡
平譯述

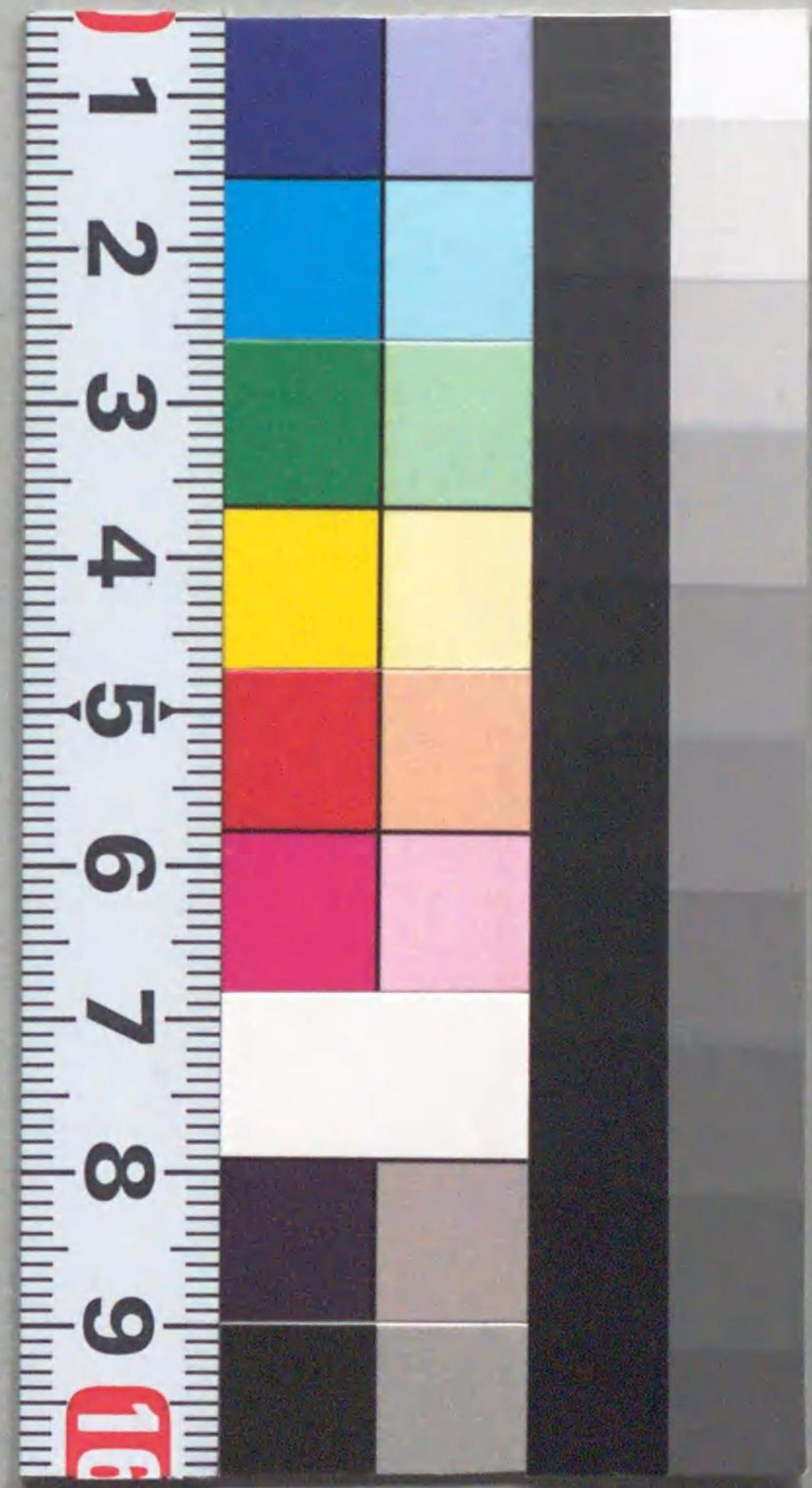
内科摘要

卷六

Y994-J10240



1200901348424



Y994

J10240

華氏内科摘要卷之六

東京

桑田衡平 譯述

霍亂 コレラ、モルビス旬

夫レコレラ、モルビスナル者ハ醫學上ニ之ヲ論
スレハ之ヲ獨發吐下病ト名ウルヲ最モ妥當ト
ス何トナレハ是レ固ヨリ毒物ノ刺戟ニ非ス亦
天行病ノ傳染ニ非スレテ獨リ此吐下病ヲ發ス
ル者ナレハナリ即チ今茲ニ論スル所ノ獨發吐

内科摘要

卷六

一

載余齋藏



I 種

W



1200901348424

下病ハ殊ニ我亞墨利加ニ於テ夏時流行スル所
ノ症ニシテ最モ適當ノ名稱ナリ又英國ノ醫家
ハ之ヲ「イングリッスコレラ」ト名ケ或ハ之ヲ「スポ
ラヂクコレラ」獨發吐下
病ノ義ト謂フ

現症 初メ先ツ惡心嘔吐ヲ發シテ飲食盡ク吐出
シ次テ綠色或ハ黃色ノ膽液ヲ吐シ胃部及ヒ肚
腹ニ疼痛ヲ覺エ稀ニハ腹痛
ナキ者アリ且下利ヲ起シテ茶
褐色或ハ黃色ノ大便ヲ溏瀉シ衰弱愈加リテ手
足厥冷シ或ハ稍發熱シ或ハ絶テ發熱セサル者
アリ乃チ此時ニ於テ緩解ヲ得サル井ハ諸症益

増進シテ四肢ニ筋抽ヲ發シ嘔吐及ヒ下利モ亦
愈盛ニシテ其吐下物水ノ如ク俄然トシテ手足
厥冷虚脱シ終ニ不幸ヲ致スコトアリ

原因 霍亂ノ素因ヲ尋ヌルニ蓋シ夏時炎天ノ候
之カ為ニ腸ノ粘液膜弛緩シ且肝臟ノ刺衝ヲ受
クルニ由ル者ナランカ乃チ是ニ於テ若シ不消
化ノ食物例之ハ未熟ノ菓物等ヲ食シ或ハ飽食
シ或ハ寒暖俄カニ變スル等ノコトアル井ハ之ニ
由テ忽チ此吐下病ヲ發スル者トス

識別 尋常ノ霍亂症ト天行ノ格列良俗名虎
狼痢トハ

其豫后及ヒ療法ニ於テ大ニ相異ナル者ナルハ
 之ヲ識別スルヲ最モ肝要ナリ乃チ尋常ノ霍亂
 ニ於テハ其吐下物概子膽液様ノ者ニシテ格列
 良ノ吐下物ハ宛モ米泔汁ノ如ク其嘔吐モ亦愈
 盛ニシテ忽チ虚脱シ肌膚青色呼吸困難及ヒ小
 便閉等ノ症狀ヲ發スルヲ以テ之ヲ鑒別スルヲ
 得ルニ加之其時ニ方テ格列良ノ一般流行スル
 ヤ否ヲ参考スル片ハ其識別ニ於テ愈確實ナリ
 ト不但シ非常ニ劇甚ノ霍亂症ニ至テハ甚夕區
 別シ難キヲ稀ニ之アリ

又格列良ノ流行中及ヒ其前後ニ於テハ一種ノ
 霍亂症及ヒ下利病ニ罹リ易シ之ヲ「コレリ」格
良前兆ト名ク即チ此症ハ之ヲ我邦夏時流行ス
 ル所ノ尋常ノ霍亂症ニ比スレハ殊ニ惡性ニシ
 テ大ニ格列良ニ類似スル者ナリ
 療法 我邦夏時流行ノ霍亂症ニ於テハ初メ先ツ
 胃部ニ大ナル芥子泥ヲ貼シテ左ノ方ヲ用フル
 片ハ實ニ其奇効ヲ奏スルヲアリ
 其方 芳香硫砂精一 良好麻僣涅失亞一 薄荷
 水四ヲ取リ混和シ用フルニ臨ンテ振盪シニ

十分時毎ニ一汚許ヲ與フ
 初期ニ於テ早ク此方ヲ用フルハ大抵一時或
 ハ二時ニシテ輕解スルコトヲ得ヘシ然レ其下利
 夥シキモノ或ハ其患者ヲ診スルト期ニ晚ル、
 井ハ上ノ方中ニハレゴリキニ汚或ハ半汚ヲ加
 フヘシ又其下利頻々ニシテ將ニ虚脱セントス
 ル者ニハ方中ノ麻、偲、温、失、亞ヲ去テ同量ノ重炭
 酸曹達ヲ加フルヲ良トス或ハ又其頑固ニシテ
 容易ニ緩解シ難キ者ニハ之ニ兼テ丁香、桂皮、若
 クハ干姜ノ浸劑ヲ用フレハ胃部ノ苦悶ヲ鎮靖

スルノ効アリ其他胃部ニ芥子泥ヲ貼シテ己ニ
 其刺戟ヲ起スハ宜ク之ヲ去テ後干姜、丁香、桂
 皮各一ツ許ヲ麵粉半匁ニ研和シ之ニ囉囉地以
 許ヲ注テ香竄巴布ヲ製シ之ヲ其部ニ貼スルヲ
 良トス又大渴引飲スル者ニハ冰片ヲ與フルヲ
 良トス

但シ其衰弱スルコト甚シキ者ニハ囉囉地ヲ用フ
 ルヲ要シ又其吐下劇甚ニシテ之カ為ニ將ニ虚
 脱セントスルハ「ラウダニユム」四十滴乃至六十
 滴ヲ澱粉半匁按スルニ葛粉ヲ以テ葛ニ和シ以
湯ヲ製シ用テ可ナリ

テ灌腸法ヲ行ヒ胃部ニ芫菁膏ヲ貼シ己ニ水泡
ヲ發スルニ至テ醋酸莫兒非半匁ヲゴム粉十匁
ニ和シテ其部ニ摻布スルヲ良トス或ハ莫兒非
ヲ以テ皮下注入法ヲ施スモ亦可ナリ

下利 ダイエレア旬

抑下利ハ本病ニ非スシテ却テ他病ノ傍症タル
ト多シト雖氏其下利夥多ニシテ容易ニ輕快シ
難キト往々之アリ之ヲ區別スレハ即チ第一ニ
ハ刺衝性下利ニシテ例之ハ生齒下利ニ於ケル

カ如シ第二ニハ嫩衝性下利ニシテ即チ腸炎ニ
於ケルカ如シ第三ニハ傍發下利ニシテ即チ泰
衰土熱ニ於ケルカ如シ第四ニハ吉利尖斯下利
ニシテ即チ弛張熱ノ末期ニ於ケルカ如シ第五
ニハ排泄下利ニシテ即チ腐蝕性其他ノ中毒ニ
於ケルカ如シ第六ニハ溶崩下利ニシテ即チ肺
癆ニ於ケルカ如シ而シテ其下物モ亦大ニ異ナ
ラサルヲ得ス故ニ其性質ニ隨テ更ニ之ヲ區別
シテ五種トス其一假令ヒ溏瀉スルモ其質全ク
水便ナル者其二膽液下利其三粘液下利其四沬

乙液下利其五脂肪下利此症ハ太是ナリ
 凡ソ下物ハ其量非常ニ夥多ナル者ハ下利ノ初
 發ニ於ケルノ外大抵其質本便ナル者罕ナリ唯
 泰衰土熱ノ所謂ル腸水下利ニ於テハ假令溇瀉
 スルモ殆ト本便ナル者多シ又腸炎及ヒ夏時流
 行下利按スルニ即チ腸加谷兒ハ大抵粘液下利ニシテ霍亂
 ノ下利ハ膽液下利トス又惡性格列良ノ下利ハ
 洩乙液ニシテ宛モ米泔汁ノ如シ
 療法總テ下利ノ療法ニ於テハ頓ニ之ヲ壓止セ
 サルヲ要ス加之症ニ隨テハ毫モ之ヲ支工可ラ

サル者アリ例之ハ猶泰衰土熱ニ於ケルカ如ク
 其下利日々三行ニ過キス其量モ亦多カラサル
 中ハ更ニ其處置ヲ要セス唯其量夥多ナル者ニ
 於テハ宜ク之ヲ調節スヘクシテ必ス之ヲ壓止
 ス可カラス
 蓋シ尋常ノ夏時流行下利殊ニ其獨發症ニ屬ス
 ル者ニ於テハ通例收斂劑ヲ用フルノ前先ツ腸
 管ノ機能ヲ整復スルノ劑ヲ用ヒ或ハ之ヲ兼用
 スヘシ例之ハ藍丸若クハ石灰汞或ハ麻屈涅夫
 亞ニ芳香大黃舍利別ヲ加ヘタル者或ハ重炭酸

曹達ニ干姜若クハ桂皮末ヲ加ヘタル者等ヲ用
フルハ能ク其下利ヲ起ス所以ノ腸管ノ狀態
ヲ恢復スルヲ以テ收斂劑ヲ用フルニ及ハスシ
テ治スルノ屢之アリ

第一百一方 芳香大黃舍利半 麻屈涅失亞十五

桂水 龍腦水各ニ ヲ取り混和シテ先ツ其一

半ヲ用ヒ三時間ヲ經テ餘ノ一半ヲ與フ
又其下利持久シ或ハ増進スルカ為ニ收斂劑ヲ
要スル者ニ於テ從來石灰劑第百ヲ稱用セリ或
ハ又精製牡蠣若クハ刺姑石ヲ賞用スル者アリ

但シ小兒ノ輕症下利ハ石灰水ニ桂水或ハ龍腦
水ヲ加ヘ用フルヲ以テ足レリトス又吉納阿仙

藥刺達尼若クハ保百設木等ハ皆齊シク單收斂

ノ効アリト雖モ腹痛ノ有無ニ拘ラス之ニ少量
ノ阿片若クハ龍腦若クハバレゴルキヲ配用ス

ルハ其ハ通例其下利ヲ防止スルノ効ヲ助テ殊ニ

能ク適應スル者ナリ又輓途ドクトル、ト子ル
氏及ヒドクトル、ゼ上、ゼ一ウアル子ル氏ハカリホ

ルニア人ノア子モプシス、カリホルニカ根ヲ用

キテ下利ヲ治スルヲ見テ宜シク醫家ノ注意ス

へキ所トセリ又ドクトル、ブネケンリジ氏ハ小
児ノ下利頻數ナル者ニ神經強壯ノ為メ且ツ緩
收斂劑トシテ酸化亞鉛ヲ稱用ス

第百二方 精製石灰五分 白糖五分 ゴム各一分 吉納

丁幾二分 ラウダ五分 ヌム二十滴 至四十滴 ヲ取り之ニ

薄荷水ヲ加ヘテ全量六汚ニ至リ混和シテ每

服半汚許ヲ與フ

第百三方 複方刺賢埴児精一分 龍腦精一分 ラウ

ダ五分 ヌム五分 汚半 白糖五分 ゴム各一分 ヲ取り之ニ桂水

ヲ加ヘテ全量六汚ニ至リ混和シテ毎三時半

汚許ヲ與フ

第百四方 鉛糖八分 至十六分 醋酸莫児非一分 ゴム二分

ヲ取り之ニ桂水ヲ加ヘテ全量八汚ニ至リ混

和シテ毎三四時一汚許ヲ與フ

又經久頑固ニ下利ニ於テハ單寧酸三分 或ハ片四分 至半分 ヲ加フヲ丸トシ用ヒ若クハ鉛糖一分 ニ

阿片半分 ヲ伍シ丸トシ毎三時ニ用ヒ若クハ鉛

糖醋酸莫児非ノ水劑第百方 ヲ用ヒ之ニ兼テラウ

ダ五分 ヌム五分 澱粉ノ灌腸法前二方 ヲ行ヒ而シテ體質虛

弱ノ者ニハアルロートルトニ適宜ノ囁嚙地ヲ

加へ與フルヲ良トス其他慢性下利ニ於テハ鉛糖水其他ノ鑛屬收斂藥ヲ以テ灌腸法ヲ行フハ能ク其効ヲ奏スル者ナリ但シ此慢性下利ニ就テハ慢性痢疾ノ條下ニ於テ更ニ之ヲ論載ス

凡ソ下利ヲ患フル者ハ飲食ノ度ヲ節スルヲ以テ必要トス故ニ總テ野菜及ヒ菓物ノ類ヲ禁シ唯糜粥及ヒ其他澱粉質ノ食餌ヲ與フルヲ適當トス但「ブラスベルリ」果物ハ其根_レ生_レズノ收斂藥タルヲ以テ民間之ヲ許用ス然レ吾鄙見ニ於

テハ恐クハ亦害アラシカ其他劇甚ノ下利ニ於テハ必ス一切硬固ノ食物ヲ禁スヘシ然レ失苟兎倍苦性ノ下利ニ於テハ其病性固ヨリ一種ノ下利ニシテ此例ニ非サルヲ論ヲ俟タサルナリ

曾テ陸軍少士官ク_レルラ_レ半島ノ戰時_レカホ_レニ_レ地ニ在テ下利症ニ罹リ諸種ノ收斂藥ヲ用_レル_レ其効ヲ奏セス及テ「トマト」彼ノ赤桃及ヒ「レモ子」下「_レ橙汁」砂糖ヲ「_レタ_レル」飲料ヲ用テ忽チ全治ヲ得シ_レアリト云フ是ヲ以テ證據トナスニ足ルヘシ

小兒霍亂コレラ、インフン

此病ハ我亞墨利加洲ノ大都府ニ於テ夏時炎天ノ頃嬰兒ヲ傷フ₁甚シキ者ニレテ世俗之ヲソレムル、コムプレイントト謂フ乃チ其原因ヲ尋ヌルニ人烟稠密ノ大都ハ大氣不潔ニレテ之ニ加フルニ暑熱ノ作用ヲ以テ此病ヲ醸成スル₁明カナリ例之ハ猶ユ₁ヨルク府及ヒヒラドルニア府ニ於テ驗温器ノ九十度以上ニ至ル₁其流行愈盛ニレテ死亡モ亦增多キカ如レ曾テ

一千八百六十六年八月中ノ極暑一週間ニ於テハ何病ヲ論セス₁ヨルク府ノ人民鬼錄ニ上ル者一千二百人餘ヒラドルニア府ニ於テハ七百人ニ及ヒ又之ヲ各府ノ同夏極暑後ノ格列良流行中ニ比スレハ其數遙ニ多シ₁況ンヤ之ヲ平常ニ比スレハ二倍ニ過ク₁ルト云フ

現症此病ハ下利及ヒ嘔吐ヲ發シテ飲食盡ク吐

逆シ身體倦怠衰弱ヲ覺エ昏睡或ハ全ク人事不省ニ陥ル₁アリ但シ其初メハ頭部熱灼シテ肚腹膨滿スレ₁此病ノ増進スルニ至テハ四肢厥冷

レテ全身瘦削ス而シテ其專ラ腸ヲ侵ス者ニ於
 テハ之カ為ニ少日ニシテ瀕死ニ至リ或ハ暴瀉
 及ヒ嘔吐甚クシテ危険ヲ致スコアリ然レ通例
 劇症ヲ發セス其下利頑固ニシテ止マス且久シ
 ク不食シ之カ為ニ漸々衰弱シテ終ニ斃ル、ニ
 至ル者多シ乃チ此病ハ生齒期ノ小兒ニ於テ殊
 ニ多ク滿四歳ノ小兒ハ之ニ罹ルコ罕ナリ
 病理 此病ニ於テ死スル者ヲ剖觀スレハ腸管粘
 液膜ノ一般ニ變色セルヲ見ルノミナラス亦必
 ス粘液腺ノ變質セルヲ見ルヘシ然レ本病ハ元

來ノ癩病ニ非スニテ却テ全身病タルコ疑ナシ
 而シテ其專ラ侵サレル所ノ部分ハ必ス身體營
 養以全裝置ヲ感傳神經ノ中樞即チ神經節トニアリ
 血液者調和ヲ妨テ其不良ノ血液腦及ヒ脊髓
 ヲ侵ス者トス是レ其精神昏懵シ或ハ全ク人事
 不省其下以加之尚其惡症ニ於テハ搐掣ヲ發ス
 ル所以也
 療法 此病ニ於テハ初メ先ツ腸管ノ機能ヲ整復
 スルヲ以テ肝要トス故ニ予ハ初期適宜ノ甘汞
 ヲ取テ每常之ニ制酸藥ヲ配用セシニ屢其偉効

ヲ得タリ
 第百七方 甘汞ハニ 重炭酸曹達刃一 干姜末ハ十二
 取火混和シテ十二包ニ分テ日ニ三四次一
 包ヲ與フ

但シ其下利微少ニシテ胃或ハ腦ノ疾患特ニ著
 シキ者ニハ甘汞ニ麻屈涅失亞ヲ配用シ其下利
 較多未者ニハ麻屈涅失亞ヲ代リニ重炭酸曹達
 ヲ加フルヲ良トス何レモ之ニ芳香大黃舍利列
 少許ヲ加ヘ用スレハ尤モ妙
 ナ世醫多クハ之ニ銀灰散ヲ稱用ス即チ此藥ハ
 予カ經驗スル所ニ於テモ亦先ツ甘汞ヲ用テ後

之ヲ用ヒ或ハ之ヲ以テ甘汞ニ代用セシカ果シ
 テ其効アルヲ見タリ
 又嘔吐頑固ニシテ止ニ難キ者ニハ胃部ニ香竈
 巴布或ハ香竈硬膏ヲ貼シ數之ヲ更換シ若クハ
 囉蘭地ヲ以テ之ヲ濕シ以テ其香竈性ヲ保タシ
 又嘔吐ノ止ムニ至ル程度トス又口渴引飲スル
 者ニハ冰片但シ如釋ノ小児ニ於テハ冰片ヲ
 布中ニ包キ搗碎シテ與フニハ
 與フル片ハ只ニ常水ヲ飲マシムルニ優レリ總
 テ食餌ハ牛乳之ニ石灰水
 以許ヲ加フアル口ルト其他
 澱粉質ノ物雞羹汁若クハ牛肉羹汁等ヲ與ヘ

外科摘要 卷六 十三 鐵除齋鐵粹

又第二期に至テハ少量ノ囉嚙地ヲ用キテ生力
ヲ保續セシヨラ要スル食物ニ交セ用フ
又其初期頭部熱灼シテ將ニ昏睡セントスル
ハ耳後ニ氷蛭少許ヲ貼シ且薄キ手巾ヲ以テ頭
部ヲ覆ヒ其上ヨリ冷濕法ヲ行フヲ良トス然レ
槩子之ヲ施スヘキノ時期ハ忽チ經過スル者ニ
シテ多クハ之ヲ施スニ及ハス微温浴冷水浴モ
亦日々數回反復シテ之ヲ行フハ卓効ヲ奏ス
ルヲアリ其他ハ下利ヲ防止シ嘔吐ヲ鎮靖スル
ヲ以テ二ノ要件トス乃チ其下利ヲ防止セント

欲セハ殊ニ坎百設木、リュビュスゲラニウム、刺達尼
等ヲ換用シ尚其劇症ニ於テハ之ニ少量ノ「パレ
ゴ」キヲ配用シ或ハ「ラウダニム」二三滴ヲ澱粉
ニ和シテ灌腸法ヲ行フヲ良トス若シ之ニ由テ
其効ヲ奏セサルハ鉛糖一匁乃至三匁ヲ澱粉
ニ和シテ之ヲ行フヲ要ス又頑固ノ症ニ於テハ
醋酸鉛ニ醋酸莫兒非ヲ伍シ之ヲ「ゴム漿」桂水ヲ
加ヘタ
者ニ和シ用フ或ハ日三次硝酸銀十二分匁ノ一
ヲ用キテ偉効ヲ得ルヲアリ又「ドクトル」エ
ル、バイルド氏ハ之ニ亞硫酸曹達 毎服一ヲ稱用

外科摘要 卷六 十三 鐵除齋鐵粹

ス又病性緩慢ニシテ持久スルハ滋養ノ食物
ヲ擬用スルヲ肝要トス殊ニ良製ノ牛肉羹汁ハ
槩子小兒ニ適當スル者ニシテ予曾テ或ル小兒
ニ於テ牛肉ヲ細製シ與ヘテ大ニ裨益ヲ得シ
アリ又諸藥其効ヲ奏セサルモ其兒ヲシテ大都
ヨリ田舎ニ移ラシムルハ之カ為ニ速ニ恢復
ヲ得ルヲアリ乃チ是ニ依テ考フレハ清鮮ナル
大氣ノ現ニ其作用ヲ為スヲ實ニ驚クニ堪ヘタ
リ

豫防法 此病ノ豫防法ハ最モ簡易ニシテ之ヲ防

キ得ヘキト亮然タリ即チ此病ヲ避ケント欲セ
ハ五歳未滿ノ小兒ハ必ス七月ヨリ九月ニ至ル
ノ間之ヲ人煙稠密ノ大都ヨリ高燥開潤ノ地ニ
移住セシムヘキトハ勿論屢戶外ニ周遊セシメ
乗車或ハ舟行セシムルハ大ニ裨益アル者ニ
シテ吾亞國ノ風土ニ於テハ殊ニ必要ナリトス
然レ此等ノ事總テ行ハレサルハ其兒ヲシテ
日々府内ノ園圃ニ遊ハシムルモ亦可ナリ
衡按スルニ我皇國ニ於テハ未タ一般流行ス
ルヲ聞カス恐クハ亞國ノ土方病ナラン

外科摘要
金鼻齋雜抄

痢疾 チセンテリ一旬

痢疾ハ即チ大腸ノ焮衝ニシテ其筋質膜及ヒ粘液膜ヲ侵ス者ヲ謂フナリ之ニ急慢虚實土方天行其他膽液性、糜爛性、瘰癧性、等ノ別アリ

現症 肚腹疼痛ニ其部ヲ按撫シ或ハ身體ノ運動

スルキハ必ス其痛ノ増進スルヲ覺エ頻ニ上圍ヲ催シテ少量ノ血液或ハ本便及ヒ粘液ニ血點ヲ交エタル物或ハ單純ノ粘液ヲ泄シ時トシテハ之ニ淋發ノ凝結シタル線條若クハ假膜ヲ混

スルコトアリ其他裏急後重ニテ肚腹絞痛ニ其急性ノ者ニ於テハ通例發熱ス

蓋シ其病劇性ニシテ持久スルキハ之ヲ第一期

ノ焮衝ヲ經テ已ニ第二期ノ糜爛症ニ罹ル者ト

看做シテ可ナリ又單純急性ノ痢疾ハ通例實性

ノ焮衝症ニシテ卒然虚脱スルコトナク土方或ハ

天行性ノ痢疾ハ大抵虚性ノ者ニシテ發熱スル

コトナク或ハ稍發熱スルモ少焉ニシテ解熱ス又

其熱泰衰土性ノ痢疾ハ猶尋常ノ急性痢疾ニ於

ケルカ如ク嘔吐ヲ發シ且四肢厥冷衰弱ヲ現ハ

内科摘要 卷六 十五 載余齋藏辛

外科摘要 卷六

金華齋藏書

ス。速カナリ又間歇熱ヲ流行スル地方ニ於テハ猶諸他人病ニ於ケルカ如ク其痢疾モ亦自然間歇性ニ陥リ易キ者ニシテ毎日或ハ隔日ニ病勢ノ緩急ヲ現ハス。アリ

解屍之變痢疾ニ由テ死スル者ヲ剖觀スレハ直腸結腸及ヒ盲腸殊ニ腸ノ下部ニ於テ多少必ス

赤色、浮腫、變厚、軟化、糜爛若クハ化膿ノ呈ハレ又時トシテハ滲出物ノ凝固シテ膜狀ヲ成ス者又見ル。アリ蓋シ此痢疾ニ於テ時々血便ヲ泄ス所以ハ其裏急後重スル時腸管筋質膜ノ攣縮ヲ

起シテ充血、嫩衝セル粘液膜ヲ縮迫スルニ由テ出血ヲ起スニ依ルナランカ又慢性ノ痢疾ニ於テハ必ス直腸或ハ結腸或ハ其兩部裏面ノ糜爛スルヲ見ルヘシ此症ニ於テハ大抵只膿様粘液ヲ泄スハ即チ其糜爛ニ由ルナリ

原因凡ソ痢疾ノ素因ヲ釀スヤ通例夏季ニアリトス而シテ我ヒラドルヒア府及ヒ近傍ノ地ニ於テハ八月中旬ヨリ九月下旬ニ至ルノ際痢疾ノ流行スルノ最モ甚シ即チ此際ハ寒暖不齊ナルヲ以テ曾テ暑熱ノ為ニ肌膚弛緩セシ人天氣

内科摘要 卷六

十六 載余齋藏書

外科精要
卷六

金匱要略

俄ニ變スル井ハ卒然寒冷濕潤ニ冒觸セラレテ之ヲ發スル者トス其他未熟ノ菓物等ノ如キ不消化ノ食物及ヒ飲水ノ不良モ亦痢疾ノ原因ヲ為スト屢之アリ但シ某ノ時季某ノ土地ニ於テハ同一ノ原因ニ由テ單純急性ノ痢疾ヲ發シ又他方ニ於テハ其土地固有ノ土方病ヲ發スルト猶土地ノ高燥卑濕ニ由テ異ナルカ如シ例之ハ丘陵ニ在テハ痢疾ヲ發シ遠ク之ト相距ラサルモ溪谷及ヒ草野ニ在テハ間歇熱若クハ弛張熱ヲ發スルト顯然タル所ナリ

豫後 抑痢疾ハ何性ヲ論セス偶不幸ヲ致ストア
リ殊ニ虚性ノ痢疾及ヒ元來痢疾ノ流行スル地
方ニ於テハ甚タ危険ナリト雖モ其他ハ早ク適
當ノ療法ヲ施ストキハ通例恢復スルヲ得ヘシ
但シ其療法ヲ怠リテ慢性ニ陥リ終ニ腸ノ糜爛
ヲ生スルハ愈々恢復シ難ク又所謂ル膽液性ノ
痢疾ニ於テ殊ニ肝臟ヲ侵スト甚シクシテ多少
變敗セル苛烈ノ膽液ヲ泄ス者ハ尋常ノ單純性
痢疾ヨリモ難治トス夫苟兎倍苦性痢疾ニ於テ
モ亦之カ為ニ屢死ヲ致ストアリ譬ハ往時「キリ

外科精要 卷六 十七 藏餘齋藏

外科摘要
卷六
十六
鐵余齋藏

ニアノ戦争中并ニ我亞國近時ノ戦争ウキルジ
ニア州シツカオニト地方ニ於ケルカ如シ
療法 單純急性ノ痢疾ニ於テハ其人壯實ニシテ
病性急劇ナル中ハ第一期中刺絡ヲ要スルヲ稀
ニ之アリト雖氏大抵肚腹ヲ按シテ其痛最モ甚
シキ部ニ水蛭ヲ貼シ而シテ後其部ニ亞麻仁粉
穀粉等ノ巴布ヲ貼スルヲ以テ足レリトス然氏
又末期ニ至テ病頑固ナル者ニハ其部ニ大ナル
發泡膏ヲ貼スルヲ良トス内服藥ハ病ノ初期未
夕幾許時ヲ経サル者ニ於テハ從來蓖麻子油ニ

ラウダニ五ト滴乃至十五滴ヲ加ヘテ之ヲ頓服
セシムレハ頗ル其効驗アリト云フ然氏其己ニ
一二日ヲ経テ好機會ヲ失フキハ寧口之ヲ用キ
サルヲ良トス而シテ后其輕症ニ於テハ藍丸ニ
吐根ヲ伍用シ一二日間之ヲ持長スルノ後劇症
テハ愈早キ之ニ龍腦ヲ加ヘテ丸トシ用フ次ニ
前方ノ藍丸ヲ止メテ吐根ニ阿片ヲ伍用シ更ニ
吐根ヲ去リテ適宜ノ阿片ニ龍腦ヲ加ヘテ之ヲ
連用シ斯ノ如クシテ病未夕輕快セサルキハ須
ク鉛糖ニ阿片ヲ伍用シ或ハ之ニ醋酸莫兒非ヲ

内科摘要
卷六
十六
鐵余齋藏

附錄
金卓齋

加へテ水ニ溶解シ用フヘシ

第百十一方 藍丸十二 吐根末六 至十二 ヲ取り混

和シテ十二丸ヲ作り毎三時一丸ヲ與フ

第百十二方 藍丸八 吐根六 龍腦十二 ヲ取り

混和シテ十二丸ヲ作り毎三時一丸ヲ與フ

第百十三方 龍腦十八 吐根六 阿片三 至六 ヲ

取り混和シテ十二丸ヲ作り毎三四時一丸

ヲ與フ

第百十四方 銘糖十二 至十八 阿片三 至十二 ヲ取り

混和シテ十二丸ヲ作り毎三四時一丸ヲ與フ

其他痢病ヲシテ速ニ恢復セシメント欲セハ須ク身體ヲ安静ニ保護スヘシ何トナレハ静息ノ必要ナルト實ニ此痢疾ニ於ケルカ若キ者ナシ而シテ淡薄ノ食餌例之ハ粥湯アルロトト其他澱粉質ノ食物ヲ與へ太夕虚弱ノ者ニハ雞羹汁或ハ牛肉羹汁ヲ用フルヲ良トス又煩渴スル者ニハ氷冷ノ粥湯若クハ「ベン子葉茶若クハ榆皮浸ヲ飲マシメ而シテ病勢尚盛ナルノ間ハ氷片ヲ少許宛與フルモ亦可ナリ

灌腸法ハ痢病ニ於テ缺ク可ラサルノ要件ニシ

内斗摘要 卷六 十九 藏徐齋藏

外科摘要 卷六 二十 鐵餘齋藏書

テ初メ先ツ緩和包攝ノ為ニ亞麻仁煎一回ノ量ニ若クハ之ニ「ラウダニウム」ヲ加ヘ或ハ左ノ方二湯乃至ヲ以テ之ヲ行フヲ良トス又判然タル實性即チ
焮衝性ノ痢疾ニ於テハ冰冷水若クハ冰片ヲ細
碎シテ之ヲ注入セシテ要ス但シ注意シテ之
カ為ニ惡寒ヲ起スノ度ニ至ルヲ勿レ

第百十五方 殿粉湯其濃淡ハ之ヲ細小ナル即

筒中ニ吸入スルニ適スルヲ度トスヲ取リ病ノ輕重ニ隨テ之
ニ「ラウダニウム」二十滴乃至六十滴或ハ其餘ヲ
加ヘテ之ヲ肛門ヨリ射入ス

又慢性ノ痢疾或ハ元ト急性ナルモ其頑固ニシ
テ經久スル者ニハ鉛糖ニ「ラウダニウム」ヲ加ヘ之
ヲ「ゴム漿」ニ和シテ灌腸法ヲ行ヒ或ハ皓礬、硝酸
銀等ヲ以テ之ヲ行フモ亦可ナリ予曾テ慢性ノ
痢疾ヲ療スルニ皓礬十匹「ラウダニウム」四十滴ヲ
亞麻仁煎四湯ニ和シテ灌腸法ヲ施シ之ニ由テ
著シク恢復ヲ得シコトアリ然レ此等ノ灌腸藥ハ
時トシテ腹痛ヲ起スコトアリ故ニ稍、經久ノ糜爛
症ニ於ケルノ外ハ總テ其刺戟ニ過クルヲ以テ
害アリトス但シ其糜爛症ニハ單寧酸ヲ水若ク

外科摘要 卷六 二十 鐵餘齋藏書

ハ「ダグリセリン」ニ溶解シ以テ灌腸法ヲ行フハ
 能ク之ニ適應スル「アリサン」フランシスコノ
 醫家ドクトル、モルセ氏ハ慢性痢疾ニ於テ「ラバ
 ル」ラック氏格魯兒曹達水水ニ十倍ノ者二三「バイン」ト「ラ一
 回」ニ注入シテ良効ヲ得シ「ラ」ヲ報告セリ
 第百十六方 亞麻仁煎文火ヲ以テ製シ「ラ」ヲ取り之
 ニ「ラウ」ダニ「ム」四十滴皓礬四氏乃至十氏ヲ加
 ヘ混和シテ直腸ニ射入ス
 從來痢疾ノ流行スル地方ニ於テハ虚性ノ痢疾
 ヲ療スルニ必ス早ク阿片ヲ用フルヲ要ス加之

規庄及ヒ衝動劑ヲ要スル「ラ」屢之アリ而シテ此
 症ニハ水蛭ヲ貼ス可カラス又自然嘔吐ヲ發シ
 易キヲ以テ吐根ヲ用フ可カラス然レ氏此吐根
 ハ半匁以下ノ少量ニ於テ之ヲ用フルハ亦缺
 ク可カラサルノ要効ヲ奏スル「ラ」アリ蓋シ其原
 因麻拉里亞按スルニ間歇熱弛張熱等ヲノ作用
 起ス所ノ不潔ノ大氣ヲ云フニ歸スル「ラ」亮然タル者及ヒ間歇性ヲ現ハス者
 ハ大卒規尼及ヒ聖叔尼ノ主治スル所ニシテ其
 他ノ藥劑ハ唯之カ佐藥トシテ用フ可キノ三印
 度ニ於テハ二三年以來マンゴスチオン「ラ」丁名

ニア、マン皮ヲ以テ越幾斯ヲ製シ之ヲ痢疾ニ用
ギヌクナ
井テ良効アルヲ發明セリ

第百十七方規尼

規尼

龍腦

吐根

阿片

ヲ取り混和シテ二十包ニ分チ或ハ丸每三四

時一包ヲ與フ

ホトプ氏ノ方劑モ亦能ク其効ヲ奏スルモノニ

テ即チ此方ハ單純急性ノ痢疾ニ於ケルヨリモ

殊ニ虚性ノ症ニ宜シ

其方硝酸

一

ラウダニユム

四十

龍腦水

八ヲ取

リ混和シテ每服半汚許ヲ與フ

又膽液性ノ痢疾ハ固ヨリ一種ノ症狀ニシテ往

々之ヲ見ルコトアリ此症ハ十日餘ニ及ンテ未タ

輕快ヲ得サルキハ甚タ危篤ナリトス而シテ之

ニ普通ノ痢疾藥ヲ用フルモ單純急性ノ痢疾ニ

於ケルカ如ク其効ヲ奏スルコト太タ罕ナリ故ニ

予ハ未タ之ヲ十分ニ經驗スルコト能ハスト雖氏

此症ニ於テハ初期ニ甘汞ヲ用キス第二週ニ至

テ徐々ニ之ヲ用ヒ且肝部ニ發泡膏ヲ貼シ其他

之ヲ要スル者ニハ阿片、鉛糖等ヲ用フルノ外收

斂劑トシテ硝酸塩酸ヲ内服セシムル等ヲ以テ最

モ確實ノ療法ト做ス但シ銘糖ト硝酸トハ共
ニ之ヲ内服セシムルハ化學上ニ於テ相忌ム所
アリ故ニ銘糖ヲ以テ灌腸法ヲ行ヒ且硝酸ヲ
内服セシムルヲ良トス或ル人ハ又少量ノ硫酸
麻僞涅失亞或ハ硫酸曹達ヲ以テ痢疾ヲ療スル
ニ其効確實ナリト云フ就中ドクトル、エル、ヂー
ハルロウ氏ハ硫酸曹達一々、ラウダニユム四十滴
桂水四湯ヲ取り混和シテ毎三時半湯ヲ與フル
ヲ良トス但シ斯ノ如キ療法ハ實性ノ者ニ於テ
其初期之ヲ用スルヲ最モ適當トス

夫苟兎倍苦性ノ痢疾モ亦猶他ノ痢疾ニ於ケル
カ如ク阿片劑及ヒ收斂劑ヲ要スト雖此症ニ
於テハ特ニ飲食ニ注意スルヲ以テ專要トス

盲痔 ヘモロイドス旬

肛圍或ハ直腸内ノ腫瘤ヲ總稱シテ之ヲ盲痔ト
謂フナリ之ヲ區別スレハ静脈怒脹及ヒ纖維腫
ノ外又内外乾濕出血ノ別アリ
現症 初メ先ツ直腸ノ壓重及肛圍ノ腫痛ヲ覺エ
大便ノ通利ニ臨ンテ其痛増進シ甚シキハ延

テ腰脚及ヒ足部ニ至ル而シテ其焮衝漸ク増進
 スルニ至テハ其疼痛連綿トシテ絶ユル時ナク
 著シク腫起シテ終ニ一二ノ腫瘤ヲ現ハス者ナ
 リ但シ其腫瘤ハ肛圍ニ發スル者即チ外痔ハ種々ノ
 疼痛ヲ起シテ其痛時々増劇シ又其肛内ニ發ス
 ル者ハ上圍ノ際其腫瘤肛外ニ脱出シ括約筋ノ
 收縮スルカ為ニ緊シク窄縊セラレテ劇痛ヲ起
 シ手ヲ以テ之ヲ押壓スルニ非スハ復納スル
 コヲ得サル者屢之アリ況ヤ其甚シキニ至テハ
 假令斯ノ如クスルモ之ヲ復納スルコト能ハスシ

テ自ラ腐壞シ隨テ脱離スルコトアリ又此内痔ハ
 時トシテ出血ヲ起シ其量少キハ一日ニ一茶匕
 許ヨリ多キハ一バイト巴ハ其餘ニ至ル者アリ加之
 諸賢ノ記載ニ依レハ僅カ一夜間ニシテ數ポン
 トノ血ヲ漏セシ者アリト云フ然レモ斯ノ如キ
 者ハ甚タ罕ニシテ通例猶少量ナリト雖モ患者
 之カ為ニ著シク貧血質トナリ面色蒼白ニシテ
 大ニ衰弱スル者ナリ

解屍之變 外痔ヲ檢査スレハ其腫瘤ハ球狀ニシ
 テ薄キ表皮ヲ被ムリ廣キ根脚ヲ以テ肛圍ニ固

外科摘要 卷六 金草齋

着スルヲ見ル但シ其未タ久シキヲ經サル者ハ
其色青白ヲ呈ハシ漸々日ヲ經ルニ隨テ其色更
ニ消除ス而シテ之ニ觸レハ通例緊張シテ彈力
アリト雖モ其嫩衝未タ退カサル者ニ於テハ頗
ル柔嫩ナリトス古人謂ラク此外痔ハ全ク唯靜
脈ノ擴張セル者ナリト然モ漸ク試驗ヲ經テ方
今其說大ニ改正スルヲ得タリ是レ即チ其部ノ
表皮及ヒ結締組織ノ擴張シテ局處充血ノ為ニ
細尿管ヨリ滲漏セル血液、淋發及ヒ淋發ノ凝結
シタル有機質按スルニ纖維ヲ含蓄シ以テ此腫
樣組織ヲ云フ

瘤ヲ成ス者タルヲ明カナリ
又内痔ハ其類多シト雖モ凡ソ之ヲ區別シテ三
種トス即チ第一種ハ堅硬ニシテ其形正圓或ハ
楕圓ニシテ其色暗赤ナリ而シテ其質ヲ檢スレ
ハ粘液膜、結締織及ヒ膨脹セル靜脈ヲ以テ成ル
者ニシテ此症ニ於テハ假令ヒ出血スルモ太夕
少量ナルヲ常トス第二種ハ鮮紅色ノ海綿樣腫
瘤ニシテ其根脚廣大ナリ而シテ其外面ハ粗糙
ニシテ動モスレハ出血ニ易ク出血スレハ必ス
動脈血ナリ乃チ此症ニ於テハ其部ノ粘液膜ニ

外科摘要 卷六 三十五 載餘齋

外科摘要 卷六

金韓齋龍林

皺襞_ハ生_レ結締組織_モ亦變厚_{シテ}細小ナル動
 靜_ニ脈及_ヒ毛細管_ノ著_{シク}膨脹セルヲ見ルハ
 又第三種_ノ腫瘤_ハ表面血絡_{多ク}錯綜_{シテ}其
 色鮮美ナリ_{而シテ}其血管_ハ假令_ヒ細小ナルモ
 時_{トシテ}多量_ノ出血_ヲ起ス_トアリ
 合併症_及繼發症_{盲痔ハ}珠_ニ肛圍_ノ糜爛_{腫瘍}裂
 傷_及疔漏_ヲ併發_シ其他男子_ニ於_テハ其交感
 二由_テ尿道_{膀胱}攝護腺_{若クハ}畢丸_及婦人_ニ於
 テ_ハ子宮_及膺_ノ刺衝症_{按スルニ}痲痺_ヲ起ス
 アリ_{或ル人ノ}說_ニ據_レハ_ハ内痔_ノ脱出_{シテ}復

納_レ難ク緊縊_セラ_レテ終_ニ腐壞スル_ニ至ル片
 ハ甚_ク危險ナリ_ト云_フ然_レ氏_吾經驗スル_所ニ於
 テ_ハ是亦怖_ル言_足ラス_及テ_之力_為ニ自然_ノ
 妙機_ヲ得_テ幸_ニ全治_ヲ營_ムト_{アリ}又_ハ盲痔_ノ焮
 腫_{セル者}ニ於_テ適宜_ヲ出血_ヲ起ス_ハ之_力為
 一時_ノ輕快_ヲ得_ルト_{アリ}況_{シヤ}其_{出血}多量
 ナ_{ラス}シ_テ常習_トナル者_ニ於_テハ頓_ニ之_ヲ閉
 止_スレ_ハ之_ニ由_テ内臟_ノ充血_ヲ起_シ若_{クハ}中
 風症_ヲ繼發ス_ルト_{アリ}醫_{タル者}宜_ク注意_スヘ
 キ_ノ要件_{ナリ}

外科摘要 卷六

二十六 載餘齋藏粹

識別 盲痔ハ動モスレハ之ヲ棋毒性贅肉直腸ノ
贅肉若クハ脱肛ト混同スルコトアリ然レ其棋毒
性ノ者ハ之ニ觸ルトニ愈堅硬ニシテ突起ス加
之患者従前ノ履歴ヲ問ヒ尚且仔細ニ身體ヲ檢
査スレハ必ス他ニ棋毒ノ徵候ヲ見ルコト又直
腸ノ贅肉ハ其生長スルニ漸ク以テ且激衝ヲ
兼發スルコトナク亦通例出血ヲ起スコトナク而シ
テ其表面ハ之ヲ盲痔ニ比スレハ較滑澤ナク又
以テ之ヲ識別スルコト得ヘシ又脱肛ハ其翻出セ
ル粘液膜ノ造構ヲ検査スレハ容易ニ之ヲ監別

スルヲ得可レ蓋シ直腸ノ出血ニ於テ其原因盲
痔ニ由ル者タルヤ否疑惑ヲ生スルコトアリ然レ
真ク下血症即チ腸出血ハ大抵泰衰土熱發黃熱等ノ
如キ顯然タル劇性病ノ致ス所ニシテ假令出血
スルモ之カ為ニ痛ヲ覺ユルコトナク又其血液ハ
暗黒色ニシテ凝結シ漏泄スルハ必ス大便ニ
混合ス其他絶テ盲痔ノ症候ヲ具フルコトナシ
原因 稟賦盲痔ノ素因ヲ有スル者アリト雖モ男
女ヲ論セス未タ婚スヘキノ期ニ至ラサル者ハ
此旨痔ニ罹ルコト罕ナリ乃チ婦人ニ在テハ月經

將サニ閉止セントスルノ時ニ方テ之ヲ發スル
日最モ多シ又温暖卑濕ノ風土ハ此盲痔ヲ催進
スル者ニテ例之ハ猶東西ノ印度地方ニ於ケ
ルカ如シ又生來多血質ノ者殊ニ其人常ニ坐業
ヲ執ル者ハ最モ痔疾ニ罹リ易ク又妊婦ノ之ヲ
患ワル者常ニ多シトス其他久シク佇立シ或ハ
硬床ニ坐スル者房事或ハ手淫ノ過度刺戟性ノ
飲食ニ過シル者下劑殊ニ薑薈ノ誤用蛔蟲不利
痢疾膀胱内ノ結石等モ亦盲痔ノ原因ヲ為シ大
便ノ秘結ハ常ニ其素因ヲ釀成スル者ナリ

金草齋

療法

抑盲痔ノ療法タル患部ノ處置ハ勿論全身
ノ景況及ヒ其原因ニ從テ治療ヲ施サスンハア
ラス乃チ先ツ第一大便ノ通利ヲ調節シテ常ニ
便秘スルヲナキヲ要ス而シテ盲痔ノ出血ハ其
己ニ常習トナル者若クハ中風肺癆痛風癩癩等
ノ素因ヲ有スル者ニ於テハ妄ニ之ヲ壓止スヘ
カラス又盲痔ヲ患フル者ハ總テ刺戟性ノ食物
ヲ戒メ唯消化シ易キ品類ヲ採用シ而シテ久シ
ク佇立シ或ハ端坐シ或ハ暴劇ノ乘馬等ハ必ス
之ヲ禁セスンハアラス

凡ソ外痔ハ初メ先ツ其刺戟ヲ起シテ稍腫脹セ
ル部分ニ緩和性ノ軟膏例之ハ豕脂其他ノ脂類
薔薇軟膏單蠟膏若クハ鯨腦軟膏等ヲ塗擦スル
頻々ニシテ且常ニ大便ノ通利ニ注意スルハ
ハ豫メ之ヲ防キ得ルコト屢之アリ就中脂類ハ日
日數回殊ニ毎上圍後ニ之ヲ塗擦シ患部ヲ
絶ハス緩和滋潤ナラシムルヲ良トス

第百十八方

沒食子末二阿片十脂一ヲ取リ

混和シテ軟膏トシ之ヲ盲痔ニ塗擦ス

第百十九方

鯨腦軟膏若クハ薔薇軟膏若クハ

以セリシ軟膏一写ヲ取リ之ニ阿片十ヲ煉
和シテ盲痔ニ塗擦ス

第百二十方

莨菪越幾斯一鯨腦軟膏一ヲ取リ

混和シテ盲痔ノ疼痛甚シキ者ニ塗擦ス

第百二十一方

單寧酸二十至三十水六ヲ取リ溶

解シテ之ヲ直腸内ニ注入スレハ盲痔ノ出血

スル者ニ宜シ

又盲痔ニ於テハ大黃硫黃及ヒ梅那ヲ以テ最モ
適當ノ下劑トス就中梅那昆設兒弗ヲ用フルヲ
良トス麻屈涅失亞ハ盲痔ヲ刺衝スルヲ以テ用

フヘカラス塩類ノ下泄藥モ亦之ヲ麻屈涅失亞
 此スレハ其刺衝スルノ較緩ナリト雖氏共ニ
 害アリトス蓋シ薑薈ノ大腸ニ於ケル因ヨリ衝
 動ノ効ヲ奏スル者ニシテ通例之ヲ痔疾ニ用フ
 ルヲ忌ムト雖氏醫家往々之ヲ以テ盲痔ノ變質
 藥トシ必量ノ薑薈ニ菲沃斯ヲ配用スル者アリ
 又灌腸法ハ安ニ之ヲ行フキハ其器械ノ盲痔ヲ
 壓迫スルヲ以テ之ヲ厭フニ似タリト雖氏肉痔
 ニ於テハ之ヲ要スルヲ屢之アリ又盲痔ノ焮腫
 セル者ニハ冷水ノ洗滌法ヲ行ヒ若クハ冷水ヲ

以テ坐浴ヲ行フキハ能ク之ヲ緩解スルコトアリ
 但シ其ノ患者ニ於テハ温湯ヲ以テ之ヲ行フヲ
 快シト云フ或ハ又盲痔ノ出血スルコト饒多ニシ
 テ之ヲ壓止セシコトヲ要スルキハ冷水若クハ明
 礬水若クハ鐵丁幾ヲ注入スルヲ良トス或ハ又
 明礬一片ヲ削リテ之ヲ滑カニシ直腸ニ挿入ス
 ルキハ能ク止血ノ効ヲ奏スルコトアリ其他將ニ
 益出血セントスルキハ必ス患者ヲシテ葶中ニ
 静息セシムヘシ
 内痔ノ脱出セル者ハ大抵唯手ニ油ヲ塗リテ之

ヲ罷入スルハ容易ニ復納スルヲ得ヘシ然レ
若シ之ニ由テ復納シ難キハ没食子單寧酸炭
酸鉛若クハ結列屋曾篤等ノ收斂性軟膏第百十
八方ニ至ルヲ見ヨク塗擦シ之ニ兼テ患者ノ攝生ヲ
守ラシメ適宜ノ下劑ヲ與フレハ頗ル經久々者
ト雖レ能ク恢復スルヲ得ヘシ
但レ經久頑固ノ盲痔ハ内外ヲ論セス手術ヲ以
テ之ヲ截除スルニ非ンハ治シ難キコトアリ其法
外痔ニ於テハ彎曲セル剪刀或ハ尖端ニ探子ヲ
具ヘタル直ビストリリヲ取テ之ヲ截除スハレ

外科摘要 卷六 三十一 截除痔瘡

注意シテ無要ノ表皮ヲ截ツコト勿レコトク氏ハ
手術ニ際其疼痛ヲシテ知覺ナカラシメシカ為
ニ亞的児ノ局處麻醉法ヲ行フヲ良トス又アル
ハム氏ハ殊ニ締斷法、結紮法等ヲ行フヲ良
トス然レ又一説ニ依レハ硝酸銀ヲ塗擦スルキ
ハ其効安全ニシテ遙ニ截除法ニ優レリト云フ
又内痔ヲ除去セント欲セハ必ス結紮法ヲ行フ
ヘシ截除法ハ甚タ危険ナリトス何トシテハ之
カ為ニ夥多ノ出血ヲ起シテ不幸ニ陥ル者多ク
之アレハナリ乃チ此結紮法ヲ行ハント欲セハ

外科摘要 卷六 三十一 截除痔瘡

一盲痔毎に縮糸或ハ麻糸ヲ以テ其根脚ヲ回纏
スル一ニ周ナルヲ最モ良トス¹ビュ一セ氏ノ針持
器ハ此結紮法ニ用キテ尤モ妙ナリ或²ハ又硝
酸ヲ以テ燒爍スルノ法ヲ讚賞セリ

肛門裂傷 ヒシル、オス、
ビ、ア、ミ、ス、英

此病ハ甚シキ疼痛ヲ起ス者ニシテ中年ノ人殊
ニ婦人ニ於テ最モ多シ乃チ其原因ヲ尋ルニ其
人從來弛緩質ニシテ常ニ坐業ヲ執リ數日便秘
スルモ之ヲ顧ミス或ハ盲痔ノ處置ヲ怠ル等ニ

由テ之ヲ將來ス者最モ多シ而シテ其症狀タル
初メ大便ノ通利ニ臨ンテ肛門ノ一部ニ痛ヲ覺
ス其痛漸々増劇レテ灼クカ如ク壓スカ如ク又
築動スルカ如ク括約筋モ亦之カ為ニ劇甚ノ攣
縮ヲ起シテ數時間緩解シ難キヲアリ患部ヲ檢
査スレハ大抵唯粘液膜ノニ損傷ヲ受クル者多
シト雖モ稀ニハ又其損傷深ク括約筋ノ筋纖維
ニ達スル者アリ而シテ初メハ唯一ノ裂傷ヲ見
レモ終ニハ侵蝕シテ潰瘍トナリ以テ肛門ノ兩
側ヲ侵スニ至ルヲアリ又其大便ヲ検査スレハ

膿若クハ血線ヲ塗附シ且ツ直腸ノ痙攣ニ由テ
大便ノ細長ナルヲ猶直腸ノ狭窄症ニ於ケルカ
如シ是ヲ以テ誤テ之ヲ狭窄症ト做スヲ徃々之
アリ其他惡性ノ裂傷ニ於テハ患者之五為ニ甚
夕困難ニシテ豈唯上圍ノ時ノ三ナラス咳嗽噴
嚏及ヒ衝動性ノ飲食按スルニ酒精及ヒニ由テ
痛ヲ起シ加之起坐ニ於ケルモ亦其痛ニ堪エサ
ル者ナリ

療法 此病ハ假令ヒ久シキヲ經ルモ大抵手術ヲ
要セスシテ治スル者多シ即チ此裂傷ハ之ヲ知

覺鋭敏ナル潰瘍ト看做シ絶ヘス緩和軟膏例之
ハ鯨腦軟膏酸化亞鉛軟膏鉛膏莖若軟膏等ヲ塗
擦シ或ハ石灰水ヲ以テ其部ヲ洗ヒ而シテ后油
ヲ醮セル絹布ヲ貼スル等ヲ良トス然レ予ハ此
症ニ於テゴルロチオン」少許ヲ取り之ニ五十倍
ノ「[」]ダリセリン」ヲ加ヘ駱駝毛ノ筆ヲ以テ之ヲ患
部ニ塗擦セシカ猶乳頭ノ裂傷ニ於ケルカ如ク
能ク人工表皮ヲ造リテ偉効ヲ奏セシマアリ又
經久頑固ノ裂傷ニ於テハ毎日或ハ隔日ニ一回
宛硝酸銀若クハ丹礬ヲ取テ輕々之ヲ其瘡面ニ

塗擦シ又其疼痛劇甚ナル者ニハ阿片コ、ア酪
 或ハ莨菪ヲ以テソツポシトリ按スルニ煉和シ
 者ニシテ漢醫ノ所謂テ小指大ト為ス
 ル蜜煎導ノ法ニ同シヲ製シ毎上圍後ニ之ヲ肛
 門ヨリ挿入スルハ能ク其痛ヲ緩解シ得ル
 アリ其他毎日二回宛石鹼水ヲ以テ肛圍ヲ洗淨
 スルヲ良トス
 又以上諸藥其効ヲ奏セサルハ宜クボイール
 氏發明ノ法ニ從テ「コプラン」ド及ヒ「ブロヂ」氏
 之ヲ改正セシ所ノ如ク截開術ヲ試ムヘシ其法
 ビストリ「」ヲ取テ内ヨリ外或ハ外ヨリ内ニ向

テ其部ノ粘液膜ヲ截開シ注意シテ括約筋ヲ截
 ツ「」勿レ而シテ右輕ク壓定法ヲ施スハ能ク
 癒合期ヲ催進シテ速ニ恢復ヲ營ム「」アリ又碩
 學ウ「ンブ」レ「ン」氏發明ノ手術アリ其法兩手ノ
 拇指ヲ肛門ヨリ挿入シテ緊シク括約筋ヲ擴張
 シ以テ其收縮カヲ克制スルニアリ

脱肛
プロラプシス、
 アニ旬

此病ハ通例小兒ニ於テ最モ多シト雖凡大人ニ
 於テモ亦直腸ノ一部脱垂スル「」往々之アリ乃

手粘液膜ノ弛緩若クハ肛門諸筋ノ衰弱セル者
 ニ於テ之ヲ發シ其他大便ノ努力ニ於ケルモ亦
 之カ為ニ直ニ脱肛ヲ起スノ常ニ多シ總テ熱帶
 地方ノ人ハ最モ此病ニ罹リ易キ者ナリ
 療法 須ク先ツ脱腸ヲ復納スルヲカムヘシ即
 手之ニ豕脂或ハ油ヲ塗リ手ヲ以テ徐々ニ壓入
 スル井ハ忽チ復納スルヲ得ヘシト雖モ是亦醫
 ノ熟煉ヲ要スル者ナリ然モ若シ之ニ由テ復納
 スルヲ能ハサル井ハ宜ク水蛭ヲ貼シ且冷濕法
 ヲ行フテ其充血及ヒ腫脹ヲ減スルノ策ヲ施ス

華丸成松又麻醉法

按スルニコロ、ホルムレヲ行
 フヲ要スルヲアリ之ニ由テ己ニ復納スルヲ

得ハ暫ク壓巾ヲ當テ、其上ニ丁狀繃帶ヲ施シ
 以テ其再脱ヲ防キ且大便ノ通利ニ注意シテ之
 ヲ調節シ其他專ラ豫防ノ策ヲ施シ而シテ一旦
 脱肛ニ罹リシ小兒ハ必ス大便ノ通利ニ臨ンテ
 努責スルヲ戒ムヘシ又其兒ノ椅子其他ノ坐
 具ハ必ス高キ者ヲ用ヒ可成の身體ヲ伸シテ居
 ラシムヘシ何トナレハ其位置愈伸直ナレハ直
 腸ヲ壓下スルノカモ亦隨テ減少スル者ナレハ

蓋シ經久ノ脱肛症タル大人ニ於テハ假令セ
 ラスチカゴム製ノ「ベッサリ」直腸等ノ脱垂スル
 器ヲ定スルヲ直腸ニ挿入シテ之ニ空氣ヲ充テ
 以テ其脱垂ヲ防ク片公之ニ由テ一時ノ恢復ヲ
 得ル「アリ」ト雖「氏」手術ヲ施スニ非ンハ全治ヲ
 得難シトス其法宜ク外科書ニ就テ質スヘシ
トニ氏外科書直腸篇
第百五十七葉ニ見ユ
 華氏内科摘要卷之六終

内科摘要

全部貳拾貳冊

桑田衡平藏板

東京藥研堀町

馬喰町二丁目

島村屋利助

丸屋善七

通三丁目
同二丁目

山城屋佐兵衛

漢元書林

